【388】

氏　名（本籍）	勝　木　言一郎（かつき　げんいちろう）（東 京 都）
学 位 の 種 類	博　　士（芸 術 学）
学 位 記 番 号	博　乙　第　2031　号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	**初唐・盛唐期の敦煌における極楽浄土のイメージ形成** －敦煌壁画に描かれた阿弥陀浄土変相・観経変相と阿弥陀三尊五十菩薩図にみるモチーフを中心に－

主　査	筑波大学助教授	博士（芸術学）	守　屋　正　彦
副　査	筑波大学教授	Dr. Phil.	中　山　典　夫
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	八　木　春　生
副　査	筑波大学名誉教授	芸術学博士	真　保　　亨

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的） 本論文は我が国にも大きな影響を示した中国の阿弥陀浄土図の成立と展開について，初唐・盛唐期の敦煌壁画に描かれた阿弥陀浄土変相・観経変相および阿弥陀三尊五十菩薩図を中心に考察する。著者は阿弥陀浄土変相・観経変相が 6 世紀半ばに中国人がつくり出した極楽浄土の視覚的なイメージであるとし，その形成について考察することを目的としている。

（対象と方法） 著者はこれらの図像が中国中央部から周辺のさまざまな地域へと伝播していったと捕らえている。現在のところ中央部での浄土図に関わる資料が見られないため，その主たる研究対象を敦煌壁画に現れた浄土図とし，また浄土図の成立に関わる他の石窟例も取上げ，中国における極楽浄土のイメージ形成について論じている。その理由は，古記録にこの図像が唐都長安における寺院の正面壁画を飾るほどであったと記されており，その成立を 7 世紀から 8 世紀にかけてやはり中国人がつくり出した阿弥陀浄土図の一種と推論している。そのため著者は序論において阿弥陀浄土図の概念と研究の沿革について述べ，第 1 章で，阿弥陀三尊五十菩薩図が描かれた敦煌莫高窟第 332 窟を例に，まず敦煌莫高窟の窟形成および窟内構成から敦煌莫高窟第 332 窟の特質を他の壁画と比較的対照しながら，その制作年代や主題について考察し，阿弥陀三尊五十菩薩が成立する前提を述べ，続く第 2 章，第 3 章で先行する阿弥陀浄土図の作例を検討している。第 3 章では小南海石窟の三仏造像を論じ，西窟の蓮華化生式九品往生図浮き彫りに言及し，阿弥陀浄土変相・観経変相に対する『観無量寿経』の関与を明らかにする具体的な例として考察。さらに浄土図に見られる九品往生を取上げ，それらの事例を第 4 章では，敦煌莫高窟第 220 窟南壁壁画の阿弥陀浄土変相について『観無量寿経』による図像解釈を行い，第 5 章では，初唐期に描かれた敦煌莫高窟第 431 窟壁画を例に，来迎引接式九品往生図の図像を考察した。同図には蓮華化生式の場合と異なり，地獄の景観も表現されているため，敦煌莫高窟第 431 窟南壁壁画の九品往生図を対象に，図像とその特質を考察し，さらに九品往生中の三品，いわゆる観経変相の十六観図の図像について第 6 章で十六観図，第 7 章では，観経変相日想観図を取上げて，仏教図像の中に描き込まれた中国の伝統的なモチーフや隠遁思想について考察を進める。これら中国的なモ

チーフの反映とともに，極楽浄土図の造形イメージの形成に見られる西域美術の関与を第８章，第９章は初唐・盛唐期の阿弥陀浄土変相・観経変相を取上げ，宝池や舞楽段など極楽浄土の景観を構成するモチーフについて考察し，第８章では，極楽浄土のイメージを演出するために造形化された「舞」と「楽」の展開とその意味を考察し，第９章では，敦煌地区における共命鳥の作例を対象に，そのイメージ形成について解釈する。これらの具体的な研究対象を解釈の手順とし，初唐・盛唐期の敦煌における阿弥陀浄土図の形成について結論を得る論文構成である。

（結果） 本研究は阿弥陀浄土図の形成に関わる諸要素について，現存の資料から推論し，とくに初唐・盛唐期の阿弥陀浄土図の形成について敦煌莫高窟に描かれた壁画を中心に考察した。各章において先行研究に触れながら浄土図の形成の背景にある経典を吟味し，十六観図に見られる中国的な人物や山水の表現について解釈した。著者が独自に着目した浄土図に見られる「舞」と「樂」の様相，また共鳴鳥の西域資料との比較研究などを論文中に位置づけることにおいて，敦煌における阿弥陀浄土図研究の指針が整理され，また独自の着目による考察を通して阿弥陀浄土図形成に関わる中国的な表現の形勢と西域的なモチーフの影響などについて見出すことができた。

（考察） 本研究では極楽浄土図の造形イメージの形成について，その発生を研究概説で触れながらも，主たる研究範囲は初唐・盛唐期の敦煌における阿弥陀浄土図の形成について考察したものであり，研究の考察の主眼が，中国中央部における中国的モチーフの浄土図への反映と，また西域的な影響について，共鳴鳥を中心に取り上げ，敦煌における浄土図研究の特徴を事例を挙げて考察している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は阿弥陀浄土図が本来中国中央部から敦煌へと伝播した図像であったとし，初唐・盛唐期の敦煌における阿弥陀浄土図の展開について，敦煌壁画を中心にさまざまな側面から阿弥陀浄土図の成立について推論している。敦煌における阿弥陀浄土図の基本的な形式について，著者は中国中央部に由来しながらも，その中に描かれた図像は当時の敦煌に暮らす人々が抱いていたさまざまな価値観が反映していたと位置づけている。これらの図像が当時の敦煌の人々が享受していた仏教思想の反映したものであることはいうまでもないが，図像には別な思想的背景，価値観も反映している。たとえば日想観図には当時の敦煌の人々が中国古来の伝統に連なる山水表現が認められ，また迦陵頻伽の舞楽段や反弾琵琶の共命鳥の図像からは西域への玄関口として存在した当時の敦煌がもつ地域性的特色が指摘できる。このように初唐・盛唐期の敦煌に暮らす人々は仏教思想を基調に，中国古来の伝統的な思想や価値観，あるいは極楽浄土ばかりを象徴すると必ずしもいえないモチーフなどをさまざまに受容し，ときに中国の他の地域とは別様の阿弥陀浄土図の図像を生み出していったと解釈している。

阿弥陀浄土図の形成について，これまで図様の成立についての編年が論じられ，また浄土図の様式と発展については，他の現存例と比較考察が行われ，ひいては我が国への影響について論じられてきたものであった。著者のオリジナルな考察は初唐・盛唐期の敦煌に見られる極楽浄土図を構成するモチーフのうちに，図像的な制約をとくに受けない十六観図に見られる観想者の表現や，舞楽段を構成する共鳴鳥をはじめとするモチーフを対象としたことであり，西域との美術交渉の背景や中国的なイメージが見られるものとして取上げ，先行する研究事例があまり見られない独自のテーマとして論じ，新たな浄土図研究における解釈の手法を示した点において，大いに評価できるものと考える。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。